

## 相談しない高校生

- 若者のコミュニケーションの使い分けと価値観の構築 -

高橋杏奈<sup>1</sup> 池田理菜<sup>1</sup> 天笠邦一<sup>2</sup> 小川克彦<sup>3</sup>

慶應義塾大学 総合政策学部<sup>1</sup> 政策メディア研究科<sup>2</sup> 環境情報学部<sup>3</sup>

### 1.はじめに

携帯電話をはじめとするパーソナルな情報通信メディアの普及により、人々のコミュニケーション形態は変化しつつある。多くの先行研究(例えば栗原, 2003)でこの変化については言及され、実証がなされていた。しかしその多くが特定のコミュニティ・フィールド内に限定した調査研究であり、生活領域全体にまたがるような視座から行われた研究はいまだ少ない現状にある。そこで本研究では対象をメディアとの親和性が高く、社会環境の変化を受けやすいと考えられる若者層に限定し、対人関係やそれを築くメディアの選択がどのように行われているのか、またその背景にどのような価値観が存在するのか、データとの対話の中で探索的理解を図ることとした。

### 2.実施調査

#### 2-1.質問紙調査の概要と結果

2007年10月から神奈川県の大學生、高校生を対象に「同性の友人」「異性の友人」「家族」「彼氏/彼女」にどういった内容の相談をする時に重要であると感じ、またその際「メール」「電話」「直接会う」「連絡しない」の内どの連絡手段を用いるかの質問紙調査を実施した。

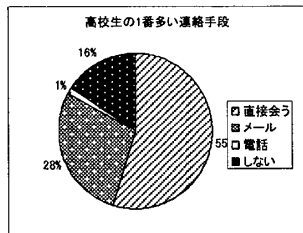


図1. 高校生連絡方法比率

その結果相談において最も多用する連絡手段が「連絡しない」という大學生は108名中2名だったのに対し、高校生は237名中37名と全体の約16%を占めた。【池田「等身大の私達」情報処理学会2010年全国大会予稿2010】

この「相談しない高校生」は共通して恋愛に関する話、愚痴、家族に関する話、将来の話の

大きく分けて4項目は誰にも相談しない傾向にあり、逆に予定を立てる、キャンセルする等の連絡手段においては「相談する高校生」と差がなかった。既存の議論ではパーソナルな通信メディアの普及により「繋がっている」確認のし合いや「無意味なコミュニケーション」が若者の間で増えているという報告がなされていたが、それに反する高校生の存在が明らかになった。

#### 2-2.インタビュー調査の概要と結果

私たちは具体的にどのような対人的価値観や考え方が「連絡しない」という結果に結びつくのかを掘り下げていく必要性を感じ、「相談しない高校生」にコミュニケーションやメディア利用・価値観を問う半構造化インタビューを実施した。以下にそのインタビューの内容を示す。

- 「何故相談しないのか」一部抜粋 -

高校生：だから自分のことをなんか友達のように話してさりげなく意見をきくみたいなことはしたりしますよ。だから自分の本当に考えてることはバラさない、みたいな

高橋：えそれはなんで？

高校生：なーんとなくです。どこで何が起きるか分からないから、本当に大切なことは自分の中に閉まっておくって感じ

上記の様に自身の内面に踏み込まれることを避け、自らが周囲に相談することに対し極めて否定的な姿勢が見られた。しかし自分から「相談する」ことは滅多に無くとも相手から「相談される」ことは拒んでおらず、友人の相談にも真面目に応じていた。つまり「相談しない高校生」は相談出来る親しい友人等が「いない」のではなく、選択的に「しない」のだ。

しかし自身の内面が周りに必要以上に知られることを気にする発言は「メールは残るし、誰かに見られる可能性があるから大切な話をする時は利用しない」等「相談する高校生、大學生」からも調査で多数あがっていた。そのため「相談しない」傾向は高校生、大學生という線引きによるものではなく、世代全体の傾向として少しずつ強まっている可能性があると考えた。

Why High School Students Don't Talk Over Their Worries  
~Communication Style and Sense of Value of Young Japanese~

1 Anna Takahashi · Rina Ikeda · Keio University

2 Kunikazu Amagasa · Keio University

3 Katsuhiko Ogawa · Keio University

### 3. 考察

#### 3-1. 相談しない若者予備軍

前述の調査結果から「大学生の中でも近年徐々に相談しない傾向が強まっている」と仮説を立て、某私立大学で行った学生生活実態調査を用いて大学生の相談傾向を年別に分析した。

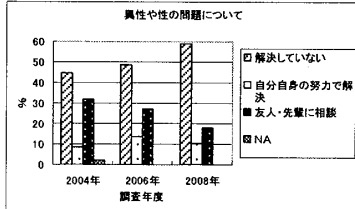


図2. 異性や性の問題についての解決方法比率

不安や悩みに関する質問の中で図2. は 2004 年から 2008 年の「異性や性の問題について」の解決方法をまとめたものだ。上段の「解決していない」は増加傾向を、中段の「友人・先輩に相談した」は減少傾向を顕著に示している。大学生も友人や先輩等に「相談しない」傾向が強まっていることが明らかである。しかし「大学生活の中であなたにとって大切だと思っていること」という項目で 2002 年から 2008 年の全調査で「良い友人・先輩をつくること」の回答率が 80%以上と最も高い支持を得ている。つまり相談はしないが、友人や先輩との人間関係を大切に思っているということになる。

また「不安や悩みはない」という項目で 2004 年から 2006 年の 97%以上の学生が NA と答えた。この結果、内面を他人に晒したくない傾向は若者全体に共通してみられる特徴であり、「相談しない若者予備軍」が多数存在すると言える。

#### 3-2. 相談されるまで待つ若者

「相談しない」ことは近年の若者世代全体の傾向として少しずつ強まって表れてきていると考え、私たちは 2009 年 11 月に神奈川県内の公立高校の学生 39 名に口頭アンケートを実施した。

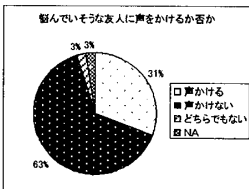


図3. 悩んでいる友人がいたら声をかけるか否か

「相談する」ことが好きという回答は 48.7%、嫌いは 41.0%、「相談される」場合は好きが 79.5%、嫌いが 12.8%となった。上図3. 「悩んでいそうな友人がいたら声をかけるか、それとも声をかけずに相手から打ち明けてくるまで待つか」に注目すると、驚くことに声をかける

学生はわずか 30.1%に止まり、逆に声をかけずに待つという学生は 2 倍以上の 64.1%に上った。

これまで「見て見ぬふりというイジメの温床」と言われてきた様に、一見「間違っている」と感じる「声をかけない」という選択肢が何故今学生の間で主流となっているのだろうか。

#### 4. 議論 - 流行コンテンツからの解釈

上記の学生と共通する価値観を背景にもつ作品として、インタビューを実施した高校生全 3 名、対象となった大学生、高校生の 60%以上が読んでいた人気漫画 ONE PIECE に着目したい。

主人公ルフィは仲間が悩んでいることに気が付いても自ら勝手に手を貸さない。しかし仲間自身から直接助けを求められると「当たり前だ!」と全力を尽くす。その背景には「あいつの過去になんか興味ねえ!」という彼の言葉がある。この作品では仲間が何かを抱えていることを「分かっている」が「土足で踏み込まない」こと、つまり相手から「相談されるまで待つ」ことがカッコイイ関係として描かれているのだ。

#### 5. おわりに - 相談しない 3 要素

上記の調査結果から若者が「相談しない」3つの要素 1. 世代としての特徴 2. 内面的要素 3. 外面的要素 を考えた。まず「世代としての特徴」とは前述の学生生活実態調査からも明らかである様に、相談の有無は高校、大学の環境的要因に起因するものではなく、2004 年頃から少しずつ顕著になっている傾向だということだ。次の「内面的要素」は「相談しない」だけでなく「悩んでいそうな友人がいたら声をかけずに打ち明けてくるまで待つ」という傾向から「自分も踏み込まれたくない領域があるから相手の内面にも土足で踏み込まない」意識を指す。実際に学生が友人に相談しない理由として「相手に迷惑をかけたくないのではないかと」高校で保健の先生を勤める教員も生徒との相談経験から発言している。最後の「外面的要素」として漫画 ONE PIECE から伺える「過去にこだわらず、相手の今を見る」「勝手に手出しせず、相手に求められた時に初めて踏み込む」若者の新しいカッコイイの定義を提案する。

#### 6. 参考文献

- 栗原正輝(2003) 「若者の対人関係における携帯メールの役割」 情報処理学会 21(1)
- 斎藤嘉孝(2005) 「家族コミュニケーションと情報機器」 情報通信学会雑誌 23(2)
- 「三田評論」(2009)慶應義塾大学出版会